

技能グランプリを活用した技能の向上と参加報告

産業デザイン科 白井 伸明

1 はじめに

我々指導員は日々の授業、授業の準備、学生の指導及び校務分掌等に追われ、自身のスキルアップをする機会が少ないのが現状である。さらに短大校においては、専門である木工の訓練自体が無く、木工の技能の維持をすることも難しい。そこで、第 32 回技能グランプリに家具職種で選手として出場することで、専門分野の技能の維持、向上を目的とするとともに、その大会出場への取り組み、および成果について報告する。

2 技能グランプリと各技能競技大会について

技能グランプリは、技能士の技能の一層の向上を図るとともに、その地位の向上と技能尊重気運の醸成に資することを目的として、各都道府県から選抜された特に優れた技能を有する技能検定の特級、1 級及び単一等級の技能検定に合格した熟練技能士たちが年齢に関係なく、技能の日本一を競い合う大会である。1 級技能士を取得するには、職業訓練指導員免許を持っている場合でも 1 年以上、実務経験のみの場合は 7 年以上の実務経験が必要である。

第 32 回大会は、北九州市小倉の西日本総合展示場をメイン会場に令和 6 年 2 月 23 日～26 日の 4 日間開催され、4 部門（繊維、建設、一般製造、一般）・30 職種で 379 人の選手が参加し競技が行われた。若年者ものづくり競技大会や技能五輪全国大会でも実施している建築大工、家具などの職種の他に、染色補正、畳製作、など技能グランプリ特有の職種も実施される。

図 1 各技能競技大会と技能レベルの相関図

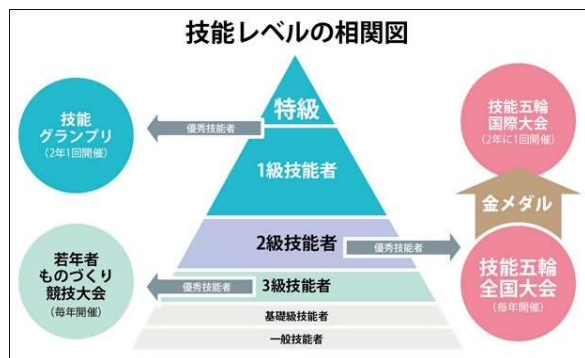


図 1 に示すとおり、ものづくり基盤強化として、中央職業能力開発協会が実施している技能競技大会には、技能グランプリの他に 3 つの大会がある。

▶ 若年者ものづくり競技大会

職業能力開発施設・工業高校等において、技能を習得中の企業等に就業していない 20 歳以下の若年者の日本一を競う大会である。

▶ 技能五輪全国大会

23 才以下の青年技能者による技能レベル日本一を競う大会。隔年で開催される技能五輪国際大会の派遣選手選考会も兼ねている。

▶ 技能五輪国際大会

世界各国から選抜された、22 歳以下（一部の職種を除く）の青年技能者が技能レベルを競う競技大会で、2 年に 1 度開催されている。わが国は、1962 年の第 11 回大会から参加している。これまでに 1970 年の第 19 回大会（東京・千葉）、1985 年の第 28 回大会（大阪）と 2007 年の第 39 回大会（静岡）が日本で開催されていて、2028 年の技能五輪国際大会を日本（愛知県）に招致することが決定しており、実現すれば 21 年ぶり 4 度目の日本での開催となる。

3. 家具職種について

3.1 競技概要

家具職種は、家具職人たちが日本の伝統的な技術を取り入れたキャビネットをつくり上げる競技である。課題 図面をもとに、鉋や鋸、鑿などの手工具のほか、木工機械や電動工具を使って木材を加工する。あらゆる工具を効率的に使用して、「木づくり」から「仕上げ」までの一連の工程を経て、一から家具を製作する。例年 10 名前後の参加者がおり、ほとんどが家具製作に従事する熟練した職人である。

3.2 競技課題

大会の約 3 ヶ月前に競技課題の発表がされた。

写真 1 に課題見本「キャビネット」を、図 2 に第 32 回技能グランプリ家具職種の競技課題図面を示す。

材料はタモの無垢材を使い、天板、帆立、脚、框扉、抽斗で構成されている。天板と帆立の仕口には指物

の要素を入れた「前後留 7 枚蟻組接ぎ」、帆立と地板・中地板には「三方胴付き」、脚と地板は寄せ蟻で接合している。抽斗は「包蟻 5 枚組接ぎ」と「5 枚組接ぎ」、扉は「小根付き二方胴付き柄組」がそれぞれ要素として入れられている。手加工、機械加工ともに熟練した技能が求められる。



写真1 競技課題「キャビネット」

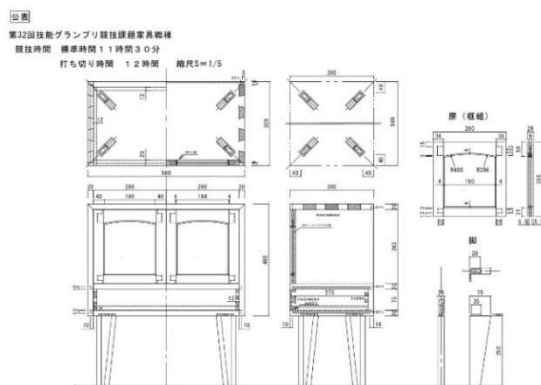


図2 競技課題図面

本体、扉、抽斗、脚のうちどの部分から手掛け、どのような手順で製作するかが競技のポイントとなっている。機械加工については機械の台数や使用制限が設けられ、全選手が交代で使用するので、作業工程の進め方も重要になる。

本校には大会で使用する昇降丸のこ盤や、軸傾斜丸のこ盤といった機械がなく、角のみ盤も仕様が全く違うものであったため、本番と同様の練習が出来なかった点は非常に困難であった。

4 大会までの取り組み

4.1 課題練習

前職で平成 26 年に一級建具制作技能士、平成 27 年に一級家具制作技能士を取得した。平成 30 年度に神奈川県に入庁してから西部総合職業技術校の木材加工コースを担当するなど、12 年程の木工の経験があった。ただ 3 年前に赴任した短大校には木工の訓練がないため、その間はほぼ木工を行っていない状況であった。

練習用材料の製材や、約 3 年間使用していなかった道具の準備、仕込み等もあったため、本格的に練習を始めたのは 1 月上旬からとなってしまった。練習は基本的に勤務時間外に行い、平日は勤務終了後の 3 ～ 5 時間、休日は週に 1 日、8 時間程度の時間を準備、練習に費やした。

まず、一度時間を気にせずに完成まで通して制作し、加工方法、作業工程の確認を行った。作業工程を 11 工程に分け、競技時間をそれぞれの作業に割り振り、目標時間の設定と加工方法を記載した作業工程表を作成した(図 3)。その後、作業工程表をもとに練習を進め、主に平日は、扉、抽斗、脚部などの部分練習をし、時間の取れる週末に、本体の練習や競技 1 日目を想定した通しでの練習を行った。

1. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。	2. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。	3. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。
4. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。	5. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。	6. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。
7. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。	8. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。	9. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。
10. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。	11. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。	12. 材料の 準備 材料は、 指定の 材料を 準備する。

図3 作業工程表

通し練習において、時間のかかった箇所の部分練習を繰り返すというサイクルで練習を進めた結果、部分練習ではほとんどの工程で目標時間に収まるようになった。ただ、通し練習になると時間を超えてしまい、3 回程通し練習を行ったが、標準時間内に完成することが出来たのは、大会前の最後の練習の 1 度だけであった。

4.2 大会準備

大会で使用する工具は、競技日の9日前、2月14日に主催者が指定した運送会社に持ち込んだ。全ての工具を事前に送ってしまうと、残りの期間の練習が出来なくなるため、半分程度だけ持ち込み、残りの工具(約70 kg)は宅配便(約25 kg)と、手荷物(約45 kg)で持参した。

5 結団式及び壮行会

神奈川県から第32回技能グランプリには10職種に15名の選手が参加することになり、令和6年1月18日(木)に神奈川県職業能力開発協会主催による神奈川県選手団結団式及び壮行会が行われた(写真1)。結団式では、神奈川県技能士会会長、及び神奈川県産業労働局労働部産業人材課長から激励の言葉を頂き、壮行会では出席した選手からの決意表明も行われた。



写真2 結団式の写真

6 家具職種競技日程

家具職種は2月24日(土)、25日(日)の2日間が競技である。競技時間は標準時間が11時間30分で、打ち切り時間が12時間となる(1日目7時間/2日目4時間30分)。自身は2月22日(木)に小倉入りし、25日(月)北九州芸術劇場で行われた閉会式に出席して帰路についた。

6.1 説明, 下見

2月23日(金)の下見では、職種別の開会式、競技課題と注意事項の説明(写真2)の後、持参工具の展開とチェック、作業場所の抽選、機械を使用する順番決めなどが行われた。また、機械を使用する試し切り等の時間も設けられ、機械の癖等の確認をして解散となった。



写真3 開会式の様子

6.2 競技

今回参加した家具職種には、9名の選手が出場し、競技が行われた。2月23日(金)の8時15分に集合し、その後説明が行われ8時45分から競技開始となった(写真4)。

前日に行われた機械の順番決めで、自分の使用しなかった順番に機械を取ることが出来ず、練習で考えていたとおりに機械が使えなかったことも影響し、設定していた1日目の工程を終えることが出来なかった。1日目が終了した時点で予定より作業が大幅に遅れていたため、2日目は打ち切り時間内での完成、提出が目標となってしまった。2日目は競技会場への慣れもあって、作業を順調に進められ、標準時間には間に合わなかったが打ち切り時間の終了およそ10分前に作品を提出することができた。ただ、仕上がりは悪く、悔しさが残る結果となってしまった。



写真4 競技中の様子

6.3 競技結果

参加選手9名のうち、標準時間内に完成したのは6名で、打ち切り時間内での完成が2名、未完成が1名であったと思われる。2月26日(月)の閉会式で成績が発表され、金賞は東京都代表選手が獲得し、銀賞に3

名が入り、銅賞、敢闘賞の入賞者はいなかった。自分を含めた参加者の内、標準時間内に完成した選手とそうでない選手の間に少しできればの差があったように感じられた。

7 参加しての課題、感想

今回グランプリに出場して感じた課題、感想をあげる。まず、第一に練習開始の時期の遅さである。民間の企業とは違い、材料の調達に時間がかかってしまう事もあるが、課題が発表されてから材料の発注をし、練習に取り組むのではなく、課題発表前から以前の大会の課題等で練習に取り組むべきだったと思う。特に日常的に木工作业を行っていないため尚更そう感じた。また、練習時間の確保も大きな課題であるが、これは練習の開始時期を早くすることで改善できるのではないかと思う。

二つ目に、同程度かそれ以上の技能を持つ技能者との意見の交換が出来る環境があればよかったと思った。技能五輪や、若年者大会では指導者が付き、練習を通しての相談や、客観的な意見などがもらえるが、今回はそういった機会がないまま本番を迎えてしまった。1 日目が終わって競技を振り返る中で、作業工程の面で短縮できそうな方法に気づき、客観的な意見がもらえる機会があれば、大会前に修正できたのではないかと思った。

三つ目は、競技大会への経験不足である。今回標準時間を超えて提出した選手は、自分も含めてグランプリに初出場の選手であり、過去の大会に出場している選手や、初出場でも金賞受賞者を出している企業の選手はみな標準時間内に提出していた。過去の大会に出場した経験や、企業として競技大会のノウハウが蓄積されている事は大きな強みになると感じた。

最後に、グランプリの参加に関わる費用についての支援があると良いと思った。今回参加するにあたり、参加費、交通費、宿泊費、工具の運搬費、材料代、工具代等それなりの費用がかかったが、全て自費であり、県や、職業能力開発協会から費用の支援はなかった。各自治体等によって違いはあると思うが、技能五輪、若年者大会、アビリンピック等とは違い、支援がなかった点は非常に残念であった。そういった支援が拡充されれば、参加者も増え、大会の目的でもある技能尊重機運の醸成がより一層図られるのではと感じた。

8 おわりに

入賞できるレベルに達することはできなかったが、グランプリに出場したこと、またそれに対する取り組みによって、自身の技能の維持、向上という目的は大いに達成された。しかし、今回グランプリに参加したことで、一番得られたものは出場したものにしかわからない「経験」であった。今回の取り組みによって得られた「経験」を学生のみならず、他の指導員にも伝えていくことで、今後の職業訓練に反映していきたいと思う。また、特に学生が出場する競技大会の指導を担当している指導員には、是非とも自らがこういった「経験」をすることをお薦めしたい。

【参考文献】

- (1) 第 32 回技能グランプリ スキルハンドブック